教育研究業績書

2025年05月07日

所属： 看護学科　　資格： 教授　　氏名： 片山　恵

研究分野	研究内容のキーワード
基礎看護学	看護技術　開発　検証
学位	最終学歴
博士（看護学）	大阪大学大学院 医学系研究科　保健学専攻 博士後期課程

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
1.基礎看護技術演習Ｉの事後学習	2019年4月現在	武庫川女子大学大学院看護学研究科の准教授として基礎看護技術演習Ｉのバイタルサインの測定においては、技術習得のために自主的な練習を促すために、技術習得の目標と期限を設け、自分が行ったことを振り返ることができる記録を作成した。
2.演習ビデオの作成	2018年9月～現在	武庫川女子大学大学看護学部の准教授として基礎看護学演習Ｉ.Ⅱ.Ⅲで担当した項目のデモンストレーション内容を必要に応じてビデオを作成し、インターネットを通じて閲覧できるようにし、学生の看護技術の練習を支援している。
3.学生の就職進学相談	2018年4月～現在	就職の相談や終息の際の小論文の添削等を行っている。
4.学部生の卒業演習　論文指導	2018年4月～現在	武庫川女子大学大学看護学部の准教授として科目「卒業演習」に対して、指導を行っている。実習での経験から研究疑問を見つけて研究テーマとし、実験手法を用いて検証していくようにし、看護技術目的と方法には、エビデンスが必要であるということを学ばせるようにしている。 2018年度4名、2019年度5名
5.大学院生への講義（博士後期課程）	2017年4月～現在	武庫川女子大学大学看護学部の准教授として大学院授業　看護エビデンス特論において、実験研究の方法を義し、学生の臨床経験を出してもらい、それが、実験手法を用いて客観的な検証を行うことができるかを学生と議論しする双方向の授業を行っている。
6.大学院博士後期課程の指導	2017年4月～現在	武庫川女子大学大学院看護学研究科の准教授として博士後期課程の大学院生に対して研究指導、助言を行っている。2017年度～副指導3名、2019年度～副指導2名
7.演習授業の知識の積み上げ	2017年4月～現在	武庫川女子大学看護学部の准教授として担当の基礎看護技術演習Ｉ　Ⅱ　Ⅲでは、期末テストに備えることができるように、ミニテストを実施している。2019年からは、半期で２回の中間テストを実施して、学生が継続して学習できるようにしている。
8.倫理的感性を育てる実践的技術演習	2016年9月～現在	武庫川女子大学大学院看護学研究科の准教授として基礎看護技術演習Ⅲの演習科目「薬物療法:注射法」を担当し、学内医師の協力を得て、安全に留意しながら実際に学生同士での注射の実施演習を行っている。この演習は、安全への意識、また、ケアを担う看護師としての責任と倫理的感性を養うことを目的としている。学生からは、相手への配慮や責任を持った看護援助の大切さを時間できたとの意見を得ている。
9.事例を用いたグループワーク	2016年4月～現在	武庫川女子大学大学院看護学研究科の准教授として基礎看護技術演習Ⅱ　の演習項目「寝衣交換」「床上排泄」では、基本的な援助方法を教授したのち、事例を提示しグループで事例に応じた援助方法を実習室で実践しながら考える課題を課した。このことから、患者の状況に応じた援助方法の計画実施を行うことを学ばせた。
10.リフレクションを重視した指導	2016年4月～現在	武庫川女子大学大学院看護学研究科の准教授として演習授業、基礎看護技術演習Ｉ　Ⅱ　Ⅲ、基礎看護学実習ＩⅡにおいて、学生が、自分が行ったことを分析的

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
		に振り返り評価できるような記録の工夫、助言などを行っている。
11.大学院生への講義（修士課程）	2015年4月～現在	武庫川女子大学大学看護学部の准教授として授業　広域実践看護学特論Ａ　基礎において看護技術のエビデンスに関する講義を行い、学生には、臨床経験の中から研究のシーズになりそうなテーマをプレゼンしてもらい研究疑問の探索を行う方法を議論する双方向授業を工夫している。
12.FD研修会への参加	2015年4月～現在	武庫川女子大学大学院看護学研究科の准教授として大学内で行われているFD研修会への参加し、他学部の教員と意見交換を行い、学部教育における自己研鑽を積んでいる。学内で開催されるFD推進委員会が主催する勉強会に参加し、授業改善に役立てている。参加した主な研修：①いかにして学生の理解が深まり、学習効果が高まるのか②アクティブラーニング型授業をデザインする③学生が学ぶ喜びを感じる授業とは？　等
13.修士課程学生の指導	2015年4月～現在	武庫川女子大学大学院看護学研究科の准教授として、「広域実践看護学演習」（１年次配当　通年　必修２単位）において、修士論文作成にむけての研究指導を行っている。2015年度主指導１名「健常成人女性における後頸部温罨法の入眠促進に及ぼす影響」、副指導１名、2016年度主指導1名「看護師の2交代制勤務と3交代制勤務の深夜時間帯での疲労の比較」、副指導1名、2017年度主指導1名「点眼薬を確実に与薬するための動作要因の検討」2018年度主指導1名「現任教育における死後の処置の教育内容の実態」
14.クラス担任としての支援	2015年4月～2019年3月	1期生のクラス担任を４年間行い学生の学生生活を支援した。主な支援内容としては、①面談による心身の状態の把握②奨学金推薦状などの発行③キャリアに関する相談④学業に関する相談⑤成績不審者のフォローと保護者との面談などであった。
15.卒業研究の指導	2012年4月～2015年4月	神戸大学医学部保健学科の講師として「卒業研究」（専門科目、4年次配当、必修2単位）において、卒業論文作成の指導を行った。 2012年度4名、2013年度2名、2014年度1名
16.解剖学と看護技術につながりを持たせる演習の工夫	2011年12月～2014年3月	神戸大学医学部保健学科において担当の「解剖学演習」（専門科目、2年次配当、半期、必修1単位）において、解剖学演習を単に人間の身体の構造の確認に留めるのではなく、人体の構造と関連づけながら看護技術における根拠を確認させるような、資料を作成し、実施した。
17.看護技術演習教育の工夫	2011年6月～2015年3月	神戸大学医学部保健学科において担当の「生活援助技術演習」（専門科目、2年次配当、半期、必修2単位）「治療援助技術演習」（専門科目、3年次配当、半期、必修2単位）、演習項目によって適宜変えて手技と手順のみを覚えさせる演習にならないように工夫した。 また、演習後には必ずグループでディスカッションを行わせ、技術の達成度のみならず、患者にとっての看護実践という視点で議論を 毎回行わせた。また、記録用紙は、リフレクションをさせるための用紙を作成し、単に行ったことを記述させるのではなく、演習の際の 思考の過程を分析的に記述させるようにしている。このことを通じて、単に演習を技術習得の場にするのではなく、看護実践について考えさせ、臨床実習につなげるものになるように工夫した。
18.看護の基盤となる概論、原論授業の工夫	2011年6月～2014年3月	神戸大学医学部保健学科において担当の「看護知へのいざない」（専門科目、１年次配当、半期必修１単位）「看護原論」（専門科目、１年次配当、半期必修１単位）の中の１コマの授業を担当し、「看護」「看

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
		護実践」「看護技術」の概念的なつながりと考え方を初学者に講義し、２年次の「援助技術論」（専門科目、2年次配当、半期必修１単位）で、具体化することによって「看護技術」についての理解を深めるように工夫をしていた。
19.看護技術演習教育の工夫	2011年6月～2014年3月	神戸大学医学部保健学科において担当の「援助関係実習」（専門科目、2年次配当、半期、必修1単位）「生活援助技術実習」（専門科目、2年次配当、半期、必修1単位）を担当していた。 これらの実習の基本的な基盤は、学内での講義「援助関係論」（専門科目、2年次配当、半期、必修1単位）「援助技術論」（専門科目、2年次配当、半期、必修1単位）で知識を養い、「生活援助技術演習」で、実習につながるような演習を行わせることで補完している。また、生活援助技術演習の中で実習病院へ行き、臨床で業務している看護師をシャドーイングする機会を設けており、これは、初めての実習前の場への慣れと学内演習のまなびと実践での活用をつなげることに成果を上げていた。
20.卒業研究の指導	2007年4月～2010年3月	大阪市立大学大学院看護学研究科・医学部の講師として「卒業研究Ⅰ」（専門科目、4年次配当、半期、必修1単位）、「卒業研究Ⅱ」（専門科目、4年次配当、半期、必修1単位）において、卒業論文作成の指導を行った。 2007年度1名、2008年度1名、2009年度2名
21.フィジカルアセスメント教育の工夫	2007年4月～2010年3月	大阪市立大学医学部看護学科の授業担当として「看護過程論」（専門科目、2年次配当、半期、必修2単位）の「フィジカルアセスメント（30/60時間）」において、講義のみではなく、実際に自分達の身体を使って、聴診、打診、視診、触診などの演習を行っている。また、市販のCDを用いて呼吸器や循環器の異常音を聴かせることにより、正常音との聞き分けの方法を教授した。
22.フィジカルアセスメント演習教育の工夫	2007年4月～2010年3月	大阪市立大学大学院看護学研究科・医学部の講師として担当の「基礎看護援助論Ⅰ」（専門科目、2年次配当、半期、必修2単位）、「基礎看護援助論Ⅱ」（専門科目、2年次配当、半期、必修2単位）、「看護過程論」（専門科目、2年次配当、半期、必修2単位）において、安全・安楽に主眼を置き、援助の必要性を考えさせながら、看護技術、フィジカルアセスメントの演習を実施していた。演習形態は、教員が実際に学生の前でデモンストレーションを行い、基本的な留意点を抑えさせる。次に、入院患者の状態に即した援助が実践できるように、実習病棟での患者を想定した疑似患者体験、教員が作成したシナリオをもとに模擬患者の状況と患者－看護師のやりとりの場面を教員が実際に演技し、学生に場面を通して理解させる方法を行っている。
23.卒業研究の指導	2002年3月～2004年4月	神戸市看護大学看護学部看護学科基礎看護学講座助手として「卒業研究Ⅰ.Ⅱ」を教授の指導のもと担当した。 2002年度2名、2003年度1名
24.基礎看護技術演習での事例を用いた演習内容の工夫	2001年4月～2004年7月	神戸市看護大学看護学部看護学科基礎看護学講座助手「看護技術Ⅰ.Ⅱ.Ⅲ」の演習を担当時に教員が患者、看護師、家族役になり、ロールプレイを行うことにより、事例を提示し、看護技術の実践的な理解を初学者である学生にさせるために工夫をした。
25.基礎看護技術における模擬患者を活用しての演習の工夫	2001年4月～2004年7月	神戸市看護大学看護学部看護学科基礎看護学講座助手「看護技術論Ⅰ.Ⅱ.Ⅲ」の演習を担当し、臨床実習につながる模擬患者を用いた教育方法の工夫を行い　演

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
		習記録の内容を分析し後の授業に還元した。また学生へ、アンケート調査を実施し、良い評価を得た。この実践を看護学研究学会学術集会（2007.07）において発表した。
2 作成した教科書、教材		
1.人体の構造からわかる看護技術のエッセンス	2019年1月9日	解剖学を“ひとの生活（生身の身体）”と関連させて理解し，基礎看護技術の根拠に位置づけて捉える参考書、看護技術の根拠となっている解剖学的ポイントを図・イラストを用いてわかりやすく提示している
2.学ぶ・活かす・共有する　看護ケアの根拠と技術 第3版	2019年1月9日	研究論文などを用いながら根拠に基づく看護技術を？説明し、その方法をを習得し、対象に応じて発展させられるように看護技術の知識、方法を解説している。今後のエビデンスの蓄積が待たれる課題も記載し、看護ケアの習得・応用のみならず、看護研究にも活用できる。
3.デモンストレーションビデオ制作	2018年4月現在	演習授業の内容のデモンストレーションビデオを作成し、Google クラスルームにアップし学生の事後学習を支援している。
4.演習科目の振り返りができる記録の作成	2016年4月～現在	基礎看護技術演習Ⅰ　Ⅱ　Ⅲ　の演習記録として、行った技術の手技としての評価を書くのではなく、自分が行った演習の思考的な面を振り返ることができるような演習記録を作成した。
5.演習科目の評価用紙の作成	2016年～現在	基礎看護技術演習Ⅲの薬物療法，注射法の演習において学士絵が確実に手技を習得することを目的に自己練習時に自己評価できる評価用紙を作成した。
6.解剖学演習マトリクスの作成（改訂版）	2012年12月	以前より使用していた解剖学演習のマトリクスに合わせた記録用紙の改定などに携わった。看護技術における解剖のランドマーク、神経走行など観察課題を与えた。課題に沿って観察したことを図示と解説を記述させ、看護技術の安全な施行への意識付けを行った。
7.「看護学生のための初めての実習ガイド：応用編」	2012年	看護学生が臨床現場に臨む際に医療人としての心構えと社会人としての最低限のマナーを身に付けておくために、実習の際に学生に理解し、実践してもらいたい態度や行動などについて解説した。 本人担当部分：企画、シナリオ、出演、編集を担当 阿曽洋子監修 共担者名：松澤洋子、片山恵、柴田しおり
8.「看護学生のための初めての実習ガイド：基本編」	2012年	看護学生が臨床現場に臨む際にの医療人としての心構えと社会人としての最低限のマナーを身に付けておくために、実習の際に学生に理解し、実践してもらいたい態度や行動などについて解説した。 本人担当部分：企画、シナリオ、出演、編集担当 阿曽洋子監修 共担者名：松澤洋子、片山恵、柴田しおり
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1.日本看護研究学会第45回学術集会	2019年4月10日	学術集会に応募した５題に関しての査読を行った。
2.社団法人日本看護協会神戸研修センターでのジェネラリスト教育の企画運営	2005年4月～2007年3月	社団法人日本看護協会神戸研修センターにおいて継続教育を担当し、ジェネラリストの臨床看護師向けの研修の企画・運営を行った。（2005年度担当25研修、2006年度12研修、主に基礎看護分野の看護技術、看護倫理担当）
3.兵庫県看護教員養成研修講師	2004年、2006年、2008年	兵庫県看護教員養成講座「看護論演習」の講師を行った。（内容：看護観を養うための理論的示唆や助言、レポート作成の指導等）
4 その他		
1.メディカコンクール看護師国家試験模擬試験出題・編集	2011年～現在	3年生、4年生向けに国家試験の形式に合わせた問題を作成している。

職務上の実績に関する事項

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1.第2種養護教員資格の取得	2008年6月	
2.第1種衛生管理者の取得	1992年6月	
3.保健師免許の取得	1991年5月	
4.看護師免許の取得	1991年5月	
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1.大阪府立池田高校での講義	2019年7月9日	看護学部進路希望者に対し、看護は何を行うのか、看護学部で何を学ぶのかを講義した。
2.武庫川女子大学女性研究者支援センター異分野交	2019年2月3日	第7回異分野交流会においてプレゼンテーションを行い、神戸松陰女子大学、奈良女子大学の研究者と交流会に参加した。
3.「まちの保健室」活動参加	2017年４月～現在	月の第一水曜日に実施している「まちの保健室」のの活動に健康相談担当者として参加している。
4.兵庫県看護協会　兵庫県ナースセンター再就業支援事業	2016年４月～2019年3月	兵庫県看護協会が実施している再就業支援事業の「フィジカルアセスメント演習」の実施責任者を担った。
5.「援助技術論」非常勤講師	2015年4月～7月	神戸大学医学部保健学科看護学専攻の科目「援助技術論」の非常勤講師を行った。
6.教務学生委員会	2012年4月～2014年3月	神戸大学医学部保健学科　学部教務に関する業務を行っていた。
7.看護教育運営委員会	2012年4月～2013年3月	神戸大学医学部保健学科看護学専攻の教育方針、ワーキンググループの設定、運営にかかわる事項の決定などを審議する委員会に従事していた。
8.ハラスメント相談委員	2011年9月～2015年4月	神戸大学医学部保健学科　部局内のハラスメント相談員を担当していた。
9.入試委員会	2008年4月～2010年3月	大阪市立大学大学院看護学研究科・医学部に関する入試業務を行っていた。
10.図書紀要委員会	2007年4月～2010年3月	図書館運営に関する計画（雑誌、図書の選択）、「大阪市立大学看護学雑誌」の発行に関する業務を行っていた。
11.学生委員会	2007年4月～2008年3月	大阪市立大学医学部看護学科において学生の生活上の助言、相談、施設使用の取り決め、就職サポートなどの業務を行っていた
4 その他		
1.教務委員	2019年4月現在	カリキュラム、授業などに関連する計画や実施を行う委員会に従事している。学内委員
2.情報処理委員	2019年4月～現在	学部内の情報処理委員として、学内PCの使用整備等を行っている。
3.第26回日本人間工学会看護人間工学部会研究発表会実行委員	2018年10月	武庫川女子大学で行った学術集会の実行委員を行った。
4.企業の受託研究	2018年7月～現在	株式会社山忠から保湿靴下の効果についての研究を依頼されている。
5.卒業演習ゼミ生への支援	2018年4月～現在	卒業演習担当のゼミ生に対して、①国家試験学習に関する助言②就職のエントリーシートの添削③日常生活上の相談などを行っている。
6.卒業演習ゼミ生への支援	2018年4月～現在	卒業演習担当のゼミ生に対して、①国家試験学習に関する助言②就職のエントリーシートの添削③日常生活上の相談などを行っている。
7.広報入試委員	2018年4月～現在	広報入試に関わる、実務、計画等に携わる委員会に従事している。 本部委員、学内委員長
8.日本看護研究学会第31回近畿・北陸地方会学術集会企画・実行委員長	2018年3月	武庫川女子大学で開催した学術集会の企画運営を行った。
9.第25回日本人間工学会看護人間工学部会研究発表会実行委員	2017年11月	敦賀市立看護大学で行われた学術集会で実行委員と座長を行った。
10.オープンキャンパスの運営・イベント実施	2015年4月～現在	オープンキャンパスの学科プログラムの実施担当を行い、また、2019年からは当日の運営責任者を担っている。
11.教育懇談会への参加と保護者個人面談	2015年4月～2019年3月	クラス担任として教育懇談会に参加し、保護者との面

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
4 その他		
		談を行い学生の生活や学習に関しての情報交換や相談などを行った。
12.クラス担任	2015年4月～2019年3月	1期生のクラス担任を４年間行い学生の学生生活を支援した。主な支援内容としては、①面談による心身の状態の把握②奨学金推薦状などの発行③キャリアに関する相談④学業に関する相談⑤成績不審者のフォローと保護者との面談などであった。
13.地域連携委員・隣地実習委員	2015年４月～2018年3月	隣地実習に関する計画、審議等を行う委員会に従事していた。
14.兵庫県看護協会阪神南地区代議員	2015年4月～2017年3月	兵庫県看護協会阪神南地区代議員を行った。
15.FD推進委員	2015年3月2019年４月	大学本部と学科内におけるFD活動推進の計画実施に関わる委員会に従事していた。学内においては学内FDのコーディネートを行った。本部でのFDの企画に対する学内への参加促進を行った。
16.第22回 看護人間工学部会総会・研究発表会　座長	2014年9月	第22回 看護人間工学部会学術集会において座長を行った。
17.大阪商工会議所主催　第4回「次世代医療システム産業化フォーラム2007」講師	2007年7月	大阪商工会議所主催　第4回「次世代医療システム産業化フォーラム2007」において「医療現場からのニーズ発信」というテーマで複数の講師とオムニバス形式で発表を行った。
18.第26回日本看護科学学会学術集会、実行委員	2004年12月	神戸国際会議場で行った学術集会の実行委員を担当した。
19.阪神淡路大震災仮設住宅健康支援	1997年4月～1998年3月	ポートアイランド仮設住宅にて、集会場での健康相談、住宅訪問、ニーズ把握などを行った。
20.第17回日本看護科学学会学術集会　事務局補助（会計）、当日会計係	1997年4月～12月	神戸国際会議場で行った学術集会の事務局の会計を担当した。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1.学ぶ・活かす・共有する　看護ケアの根拠と技術　第3版	共	2019年1月9日	医歯薬出版株式会社	研究論文などを用いながら根拠に基づく看護技術を説明し、その方法をを習得し、対象に応じて発展させられるように看護技術の知識、方法を解説している。 今後のエビデンスの蓄積が待たれる課題も記載し、看護ケアの習得・応用のみならず、看護研究にも活用できる。
2.人体の構造からわかる看護技術のエッセンス　看護の視点で学ぶ解剖学ワークブック付き	共	2019年1月9日	医歯薬出版株式会社	解剖学を“ひとの生活（生身の身体）”と関連させて理解し，基礎看護技術の根拠に位置づけて捉える参考書 看護技術の根拠となっている解剖学的ポイントを図・イラストを用いてわかりやすく提示している
3.看護ケアの根拠と技術―学ぶ・試す・調べる	共	2013年3月	医歯薬出版 第2版 p.1-226	基本技術からの応用や発展のさせ方に重点をおき、臨床への適応の助となること、今後の臨床看護実践と看護研究の発展に役立つことを目指してまとめたテキスト。 本人担当部分：11創傷管理技術ｐ.147,154-160　褥瘡のケア、12症状生体機能管理技術ｐ.161-184体温測定、呼吸測定と診査、脈拍測定と診査、血圧測定 村中陽子、玉木ミヨ子、川西千恵美　編 共著者名：青木涼子、阿部美香、岡田淳子、片山恵、蒲生澄美子、北代直美、今野葉月、三宮有里、鈴木小百合、関口恵子、寺岡美佐子、登喜和江、戸田由美子、野原みゆき、堀之内喜代子、本多和子、松崎和代、松下恭子、山下裕紀、吉武幸恵、脇坂豊美
4.「やってはいけない看護ケア」	共	2010年4月	照林社 第1版 p.1-212	ナースが知っておかなければならない「やってはいけないケアと処置」をあげて、なぜやってはいけないのか、その根拠を解説する。さらにどう対応するかという問題にも言及する。 本人担当部分：皮膚ケアp.130,131 コミュニケーションの項　ｐ.201,202 川西千恵美　編 共著者名:今井芳枝、大橋歩、沖中由美、小野光美、片山恵、上山千恵子、北川恵、塩川ゆり、重松豊美、柴崎恵、柴田しおり、竹内智

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
				子、夷祐子、谷洋江、千葉信一、登喜和江、仁平雅子、橋本裕子、服部馨子、原祥子、板東孝枝、松崎和代、森田恵子、森脇智秋、安原由子、山下裕紀
5.こんなとき臨床で役立つ看護理論―「困った患者さん」のケアが変わる	共	2004年12月	メディカ出版 p.1-149	「困った患者さん」のケースを取り上げ、それぞれに対して有効な看護理論を紹介。どのように問題状況を見ればいいのか、よりよい看護を行なうにためにはどのようなアプローチをとればいいのかを提示。 本人担当部分： 第2章　理論を実践に活かす ｐ.14-18　コービンとストラウス理論 ｐ.34-38　ヘルスプロモーション理論 ｐ.39-43　バンデューラ　自己効力感 ｐ.69-74　ミッシェル　病における不確かさ理論 ｐ.101-105　ヘンダーソン理論 ｐ.116-120　トラベルビー理論 高田早苗　編著 共著者名：片山恵、上山千恵子、川上由香、小林智子、塩川ゆり、柴田しおり、登喜和江、仁平雅子、蓬莱節子、正木みどり、森下晶代、山下裕紀
6.「やってはいけないケアと処置」	共	2001年10月	照林社	ナースが知っておかなければならない「やってはいけない」ケアと処置をあげて、なぜやってはいけないのか、その根拠を解説する。さらにどう対応するかという問題にも言及する。 本人担当部分：処置・ケアの項ｐ.69,70-72 コミュニケーションの項ｐ.80,82 川西千恵美、山内豊明　編 共著者名：明田知子、笠崎佳江、片山恵、北川恵、塩川ゆり、柴田しおり、高橋千恵子、次橋歩、登喜和江、仁平雅子、原祥子、松田馨子、森田恵子、山下裕紀
2 学位論文				
1.腹臥位への体位変換による腸蠕動運動促進と排便促通効果（博士論文）	単	2011年3月	大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻	腹臥位のポジショニングが、便秘症を改善する対症療法になりえるかを検証した。腹臥位施行前、施行中、施行後の腸蠕動音を計測し、音分析を行って比較した。結果は、腹臥位後に最も腸蠕動音の量が多かった。また、便秘症の糖尿病の患者を対象に腹臥位の施行を行った結果、便秘症の改善が見られた。よって、腹臥位は便秘症の対症療法になり得ることが示唆された。
2.褥瘡の発生予測に関する看護学的研究 －皮下脂肪との関連－（修士論文）	単	2001年3月	大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻	褥瘡の発生と体格との関連性に着目した。皮下脂肪厚をエコーで計測し、厚い群と薄い群にわけ、長時間仰臥位における仙骨部の血液中のHb値や発赤の状態の変化で検討した。結果、皮下脂肪の厚い群は、虚血や貧血は少なく、やせ群には虚血や貧血が多いことがわかった。
3 学術論文				
1.ベッド上での水平移動時における看護師の腕の差し入れの深さからみた作業効率性の検討（査読付）	共	2019年3月	武庫川女子大学看護学ジャーナル 4 p.97 - 107	ベッド上での水平移動時の看護師の腕の差し入れの深さからみた作業効率性について明らかにすることを目的とした。研究デザインは準実験研究である。被験者は、女性看護師10 名とし、実験は1 名の被験者が3 名の模擬患者に、腕の差し入れの深い群と浅い群の2 種類についてベッドの右側へ引き寄せる水平移動を設定して実施した。測定項目は重心軌跡として、足底の荷重中心の軌跡を重心線の軌跡、仙骨部のマーカーを重心の上下の動きを反映するデータとして測定した。腕の差し入れの深い群のほうが浅い群に比べ、荷重中心の総軌跡長が有意（ ｐ 0.05）に短く、所要時間は有意（ ｐ 0.01）に短く、動作回数は有意（ ｐ 0.05）に少なかった。また、腕の差し入れの深い群をやりやすいと選択した被験者が有意（ ｐ 0.01）に多かった。これらの結果を得たことから腕の差し入れの深い群のほうが作業効率があがっていたことが明らかとなった。 假谷 ゆかり 伊部 亜希 田丸 朋子 本多 容子 片山 恵 向山 広子 阿曽 洋子
2.標準体型高齢者の頭		2019年3月	武庫川女子大学看	本研究は、高齢者の体型差を考慮した褥瘡予防ケア開発の為の基礎

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
部挙上角度の違いからみた仙骨部・臀部血流量の比較（査読付）			護学ジャーナル 4 p.69 - 76	研究として、標準体型高齢者の褥瘡予防におけるベッド挙上角度はどの角度が望ましいのかを明らかにするために、標準体型高齢者17名を対象に頭部挙上20 度時、25 度時、30 度時の各仙骨部、臀裂部、左右臀部の計4 箇所の血流量を測定した。 結果及び考察として、仙骨部時間経過別血流量では、先行研究でも言われている通り、前期高齢者においては頭部挙上30 度までなら仙骨部には負荷をかけないといった結果が実証された。また、左右の臀部時間経過別血流量では、頭部挙上25 度時と30 度時のベースライン血流量から一部の時間経過において血流量が有意に増加しており、臀部は圧迫を受けやすい部位でもあり血流量増加の原因はうっ滞である可能性もあることから、今後圧迫状況も踏まえた検証の必要性が示唆された。 岩﨑 幸恵 阿曽 洋子 宮嶋 正子 片山 恵 田丸 朋子 山口 晴美 杉浦 圭子
3.乾熱法の後頸部温罨法による心拍 間隔時間と末梢皮膚温の変化（査読付）	共	2019年3月	武庫川女子大学看護学ジャーナル、 4 p.35-45	本研究の目的は乾熱法を用いた後頸部温罨法による心拍間隔時間と末梢皮膚温の変化を検討することである。成人女性15名に、後頸部温罨法を30分間行い、心拍間隔時間(以下IBI値)、手足の表面皮膚温度 の測定を行った。また、同一被験者に後頸部温罨法を行わない対照群を設定し、同様の測定を行った。 結果、IBI値の増大が測定開始後、対照群は21分のみで、実験群は12分から27分まで持続していた。後頸部温罨法の実施によりIBI値が大きくなるまでの時間が早く現れ、IBI値の増大が持続しているのは交感神 経活動の抑制が考えられた。 川原恵、片山恵、阿曽洋子
4.熱作用に関して手浴が全身浴の代 用となる可能性の検証―表面皮 膚 温の変化および温度感覚・快 適感 覚から―（査読付）	共	2019年3月	武庫川女子大学看護学ジャーナル、 ４ p.13 -23	温熱作用に関して手浴が全身浴の代用が可能かについて、健康な女子大生18 名を対象に比較検証した。全身浴と手浴は、どちらも左右の手背・前腕・下腿の皮膚温を上昇させ実施後60 分までその影響が続き、実施後60 分値に差がなく、基準値より有意に高く同様の温熱作用を及ぼした。
5.臨床看護師のキャリア発達過程 ―職務経験10年のプロセスに焦点をあてて―（査読付）	共	2018年11月	日本看護管理学会誌2018年 22巻 1号 p.1-11	離転職経験がなく役職をもたない臨床看護師の職務経験10年のキャリア発達過程を明らかにすることを目的とし、職務経験10～15年未満の臨床看護師7名を対象に，半構造化面接を行い質的に分析した。その結果，職務経験10年のキャリア発達過程は5フェーズで成り立っていることが明らかになった。中本 明世，矢田 眞美子，三谷 理恵，片山 恵，細名 水生
6.高齢者に対する足浴は有酸素運動となるか（査読付）	共	2017年3月	武庫川女子大学看護学ジャーナル 2 p.75-81	本研究の目的は足浴が膝関節などの運動器に負担をかけない有酸素運動になるか検討することである。 高齢者29名（平均73.2歳）を対象に、足浴を30分間 行い、脈拍数、前額部および両下肢皮膚温の測定と主観的な運動感の評価の分析を行った。その40％の運動強度となる脈拍数に至ったものはいなかったが、主観的評価では「運動した感じ」に有意差があった。足浴が有酸素運動になるかの指標として酸素消費量が有効化の検討が必要である。 新田 紀枝、本多 容子、片山 恵、田丸 朋子
7.A review of educational support approaches according to the characteristics of candidate diagnoses and queries considered during nursing diagnosis case study review	共	2016年3月	武庫川女子大学看護学ジャーナル １巻 p.95-105	本研究では、看護診断事例検討会における診断候補と看護診断上の疑問点を明らかにし、その傾向から今後の教育的サポートのあり方を検討した。問点では、「患者の状態の臨床判断」「同時に発生する可能性がある診断」「スクリーニング段階の診断候補」「類似の心身状態を示す診断」「医療問題との判別」「セルフケア不足の捉え方」等があげられた。これらの疑問点に対し、事例と結びつけた概念学習や事例内容の見直し、各施設の特性を踏まえたサポートの必要性が示唆された。 本人担当部分：共同研究につき、抽出不可能 共著者名：Kume, Y., Aso, Y., Katayama, M.

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
meetings （査読付）				
8.Nursing Students' Attitudes towards Nursing Process/ Diagnosis Instruction Across a Multi-Year Academic Curriculum （査読付）	共	2016年3月	武庫川女子大学看護学ジャーナル 1巻 p.81-93	本研究では、1年から3年までの複数学年で開講される看護過程・看護診断教育の中での看護学生の看護過程・看護診断に対する態度についての横断的な分析を行い、教育のあり方を検討した。その結果、初級編後で認識は高いが、その後に認識や自己評価が低下していた。看護診断学習後で自己評価と認識の間に関連性が示されており、達成感を維持し、初期より連続性を維持した継続的カリキュラム構成とする必要性が示唆された。 本人担当部分：共同研究につき、抽出不可能 共著者名：Kume, Y., Aso, Y., Katayama, M.
9.高齢男性の回復期脳卒中患者における非麻痺側筋肉量の変化からみた排尿援助のありかたについての検証 （査読付）	共	2014年4月	老年看護学Vol.18 No2 pp.38-47	片麻痺がある脳卒中回復期の高齢男性患者に対して、排尿援助方法によって非麻痺側筋肉量に違いがあるのかを調査した。その結果、介助ありでも立位保持を促される排尿援助を受けることで筋肉量が維持向上につながることが示唆された。 本人担当部分：共同研究につき、抽出不可能。 共著者名：鈴木みゆき、阿曽洋子、伊部亜希、徳重あつ子、片山恵
10.移動援助動作時の腰部負担評価を目的としたアセスメントツール(TAMAツール)の開発 －上方移動版における妥当性と信頼性の検証－ （査読付）	共	2012年3月	Health and Behavior Sciences 10巻2号 p.81-91	移動援助動作時の腰部負担評価を目的としたアセスメントツール(TAMAツール)を開発し、上方移動版における妥当性と信頼性について検討した。ツールは上方移動援助動作における安定性、効率性および腰部負担のアセスメントツールとして妥当であった。ツールにおける採点者内信頼性および採点者間信頼性を認めた。 本人担当部分：共同研究につき、抽出不可能。 共著者名：田丸朋子、阿曽洋子、伊部亜希、本多容子、新田紀枝、片山恵、山本美輪
11.腹臥位への体位変換が便秘症の糖尿病患者にもたらす排便促通効果 （査読付）	共	2011年12月	日本健康医学会誌 19巻4号 p.186-194	本研究の目的は、便秘症の糖尿病教育入院中の患者に対して腹臥位の施行による排便促通効果を検証し、腹臥位施行が便秘症に対する対症療法になり得るかを検討することである。結果から、腹臥位施行による排便促通効果が明らかになった。そして、腹臥位は、特殊な道具や技術が必要ではなく簡便に施行できる方法であることから、便秘症を改善する対症療法となり得ることが示唆された。 本人担当部分：企画　実験実施　分析　まとめを担当 共著者名：片山恵、阿曽洋子、伊部亜希、鈴木みゆき、徳重あつ子、本多容子、田丸朋子
12.脳波からみた介護老人福祉施設入居者における仰臥位から坐位への姿勢変化がもたらす脳活動 （査読付）	共	2011年7月	日本老年医学会雑誌 48巻4号 p.378-390	脳波のパワースペクトルを用い、仰臥位から坐位への姿勢変化(20分間)がもたらす脳活動について無作為な順序で検討した。介護老人福祉施設入居者17名(平均年齢85.35±8.26歳)を対象とした。仰臥位から坐位への姿勢変化がもたらす大脳活性は、姿勢変化後20分以内に関してはベッド上坐位よりも椅子坐位の方が大きいことが示された。 本人担当部分：共同研究につき、抽出不可能 共著者名：徳重あつ子、阿曽洋子、伊部亜希、片山恵、木村静
13.Effects of Foot Bathing on Exercise Capacity in a Fall Prevention Program for the Elderly （高齢者に対する転倒予防プログラムでの運動能力への足浴の効果）（査読付）	共	2011年7月	日本健康医学会雑誌 20巻2号 p.65-72	運動前の足浴が、運動能力を向上させる効果があるか否かを検討するため、足浴介入研究を行った。「足浴群」の方が、運動能力が向上したと考えられた。すなわち足浴の温熱効果により、関節可動域の拡大や運動効果の増強につながった可能性が考えられる。つまり、転倒予防教室における運動前の足浴は、運動効果を向上させる可能性が示唆された。 本人担当部分：共同研究につき、抽出不可能。 共著者名：本多容子、阿曽洋子、伊部亜希、片山恵、田丸朋子
14.Relativity of Postural Change into Prone Position and Effect of Bowel Intestinal	共	2011年4月	Health and Behavior Sciences 9(2) p.108-117	排便を促進するための腹臥位(PRP)への体位変換と腸蠕動活性化の効果との関連性を検討した。結果、BSはPRP期間中に減少傾向であったが、SUP（仰臥位）前、PRP20、PRP30およびSUP後の間ではSUP後に有意な増加が見られた。SUPをPRPに変化させると30分間でBSのパワー値が増加するため、この体位変換で蠕動が促進された結果、自律神経反射と血流変化が腸管と腹部の刺激に関与したと考えられた。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
Peristalsis Activation for Elderly People （高齢者に対する腹臥位体位変換による腸蠕動運動との関連性）（査読付）				本人担当部分：企画、実験実施　分析　まとめを担当 共著者名：Katayama Megumi、Aso Yoko、Ibe Aki、Suzuki Miyuki、Tokushige Atsuko、Honda Yoko、Tamaru Tomoko
15.ケアハウス入居高齢者に対する足浴が歩行に与える影響の検討　－転倒予防の観点から－　（査読付）	共	2010年7月	日本健康医学会雑誌 19巻2号　p.70-75	転倒リスクが高いとされるケアハウス入居中の女性高齢者に対し、1週間に3回の足浴を実施し、足浴が歩行に与える影響を検討した。1週間に3回の足浴を実施すると、1回目と2回目の足浴後において足指部の荷重最大値が増加する傾向がみられた。ケアハウス入居高齢者に対する足浴は、歩行時の足指部で地面を蹴りだす力を向上させ、歩幅を増加させる効果があることが明らかになった。 本人担当部分：共同研究につき、抽出不可能。 共著者名：本多容子、阿曽洋子、伊部亜希、田丸朋子、片山恵
16.脳波計測に基づく仰臥位から坐位への姿勢変化がもたらす脳活性についての研究（査読付）	共	2009年2月	生体医工学 47巻1号 p.15-27	脳波を用いて大脳の活性化の検証を行った。脳波は大脳のニューロンの電気活動を頭皮上から測定した。健康な男女30例を対象とした。経験する角度は順序効果を除外するためランダムに決定した。仰臥位から坐位姿勢への姿勢変化は大脳を活性化させ、ベッド上の坐位姿勢は、大脳を活性化する姿勢として有効であることが明らかとなった。認知症の予防的アプローチとしても坐位姿勢の活用の可能性があり、特に坐位80度は脳全体を活性化させたため、ベッドの頭側挙上角度は大きい方が効果的であると考えられた。 本人担当部分：共同研究につき、抽出不可能。 共著者名：徳重あつ子、阿曽洋子、伊部亜希、岡みゆき、片山恵
17.回復期脳卒中片麻痺患者の非麻痺側筋肉量と基本的ADLとの関連　（査読付）	共	2009年2月	日本健康医学会雑誌 17巻4号 p.3-9	回復期の卒中片麻痺患者24名(平均年齢75.8歳)を対象に、非麻痺側筋肉量と基本的ADLとの関連と、ADLを維持するための非麻痺側筋肉量の意義を検討した。非麻痺側筋肉量が大きいとBI得点も大きいという関係にあり、特に下肢ではその関係が強いことが明らかになった。これによって回復期の脳卒中片麻痺患者においては、下肢を用いた動作を積極的に促し、下肢筋肉量を強化していくことが、基本的ADLの維持・向上につながる可能性が示唆された。 本人担当部分：共同研究につき、抽出不可能。 共著者名：岡みゆき、阿曽洋子、伊部亜希、徳重あつ子、片山恵
18.ADLの維持と褥瘡予防を両立させるための体圧分散マットレスの評価 －マットレス上で起き上がり動作時の沈み込み、筋活動量、動きやすさの視点から－（査読付）	共	2007年2月	日本褥瘡学会誌 Vol.9 No.1 p.81-86	動きやすさを評価するために、表面の軟らかさが異なる4種類のマットレス上で同一方法の起き上がり動作を行ってもらい、動作中のマットレスへの身体の沈み込み、筋活動量、主観的な動きやすさを測定した。その結果、使用したマットレスでは、身体の沈み込みの大きさは、エア＞ウレタンフォーム＞ポリエステルの順であった。ウレタンフォーム素材では、沈み込むほど筋活動量が大きくなるという関係がみられた。主観的には、沈み込みが小さいマットレスが動きやすいと評価された。以上より、体圧分散マットレス使用者で自力動作も可能な場合、沈み込みが小さい軟らかすぎないウレタンフォームマットレスの使用が望ましいと示唆された。 本人担当部分：共同研究につき、抽出不可能。 共著者名：岡みゆき、阿曽洋子、伊部亜希、徳重あつ子、片山恵、高田 幸恵
19.組織会員のありかたを巡る課題と提言　組織会員のニーズ調査をとおして（査読付）	共	2003年12月	日本災害看護学会誌　5巻3号 p.17-22	日本災害看護学会の組織会員の、学会に対するニーズを明らかにすることを目的にアンケートを実施し,旧会員5施設(回収率42%)、現会員53施設(同68%)より回答を得た。その結果、組織会員が学会に最も期待しているのは「災害関連の情報」であり、その他、「ワークショップの開催」であった。また、「日本看護協会の災害看護活動との区別や位置づけが不明瞭」との意見が、特に地方看護協会を母体とする組織会員から多数寄せられた。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
20.起き上がり援助技術方法の違いが看護者の生体負担に及ぼす影響　（査読付）	共	2000年12月	日本看護研究学会雑誌 23巻5号 p.43-53	本人担当部分：共同研究につき、抽出不可能。 共著者名：池川清子、安藤幸子、横内光子、沼本教子、高田早苗、高田昌代、吉永喜久恵、大野かおり、片山恵、新家和子、奥川薫 12名の女子大学生を被検者とした。被検者は二つの異なる方法の起き上がり援助を行った。一つは一般的にこれまで用いられてきた方法(A法)であり、もう一つは力学的根拠に基づいて開発された方法(B法)であった。起き上がり援助実施時に、酸素摂取量(VO2),心拍数及び筋電図を測定し生体負担の指標とした。VO2及び心拍数はA法の方がB法に比べ有意に高かった。A法の右上腕二頭筋及び脊柱起立筋の筋電図積分値(iEMG)はB法より有意に高く、一方大腿直筋のiEMGはA法が低値を示した。 本人担当部分：共同研究につき、抽出不可能。
21.阪神・淡路大震災被災地仮設住宅住民の健康及び生活実態の年齢層別の分析　（査読付）	共	1999年3月	老年看護学 4巻1号 p.120-128	共著者名：柴田しおり、片山恵、吉岡隆之、柴田真志、平田雅子 阪神・淡路大震災被災地仮設住宅住民の健康及び生活実態を 20～54歳(青壮年期),55～64歳(向老期),65歳以上(老年期)の3群の年齢層に分けて分析し,老年介護の視点から検討した。大規模災害後の中・長期的な看護支援活動では、老年期の人々や障害者への援助と同様に、社会制度的な保護の対象とならない向老期の人々への身体的・精 神的・社会的問題に対する積極的な援助が必要であると示唆された。 本人担当部分：共同研究につき、抽出不可能。
22.阪神淡路大震災で被災した仮設住宅住民の生活と健康実態及び継続的な看護支援活動の評価　（査読付）	単	1999年3月	神戸市看護大学紀要 第3巻 p.29-38	共著者名：中田康夫、沼本教子、 片山恵、片山京子、吉永喜久恵、中島美繪子 継続的な看護支援活動を行ってきた阪神淡路大震災被災者の仮説住宅住民の生活および健康の実態と、継続的な看護活動の評価をおこない、大規模災害後の長期的な看護援助のあり方について考察した。 本人担当部分：共同研究につき、抽出不可能。
				共著者名：安藤幸子、中田康夫、片山(渡邊)恵、片山京子、沼本教子、臼井千津、吉永喜久恵、中島美繪子
その他				
１．学会ゲストスピーカー				
２．学会発表				
1.全身浴と手浴の表面皮膚温の変化		2018年12月	第38回日本看護科学学会学術集会（愛媛県）	手浴が全身浴と同様の温熱効果を示し全身浴の代用が可能かを検証するために全身浴の表面皮膚温の変化と手浴の皮膚温の変化を比較した。被験者は、20歳の健康な女子大学生18名とし、10分間全身浴もしくは手浴を実施し、その後60分間安静とし、その間の表面皮膚温を測定した。全身浴と手浴はどちらも全身8箇所の皮膚温が上昇し、手浴は全身浴と同様の温熱効果を示したことから全身浴の代用が可能であることが示唆された。 山口晴美、阿曽洋子、田丸朋子、片山　恵、岩﨑幸恵、上田記子、清水佐知子
2.深夜時間帯における他覚的、自覚的疲労の実態－２交代制勤務と3交代制勤務での比較－、	共	2018年12月	第38回日本看護科学学会学術集会、P1-2-48（松山）	３交代制勤務と２交代制勤務の自覚的、他覚的疲労の大きさに違いがあるかを明らかにすることを目的とした。被験者は、看護援助の内容が近い2交代、3交代勤務病棟の年齢30～40歳代の女性看護師24名であった。他覚的疲労は自律神経、血圧、体温、筋硬度えとし、自覚的疲労は調査用紙を用いた。その結果、副交感神経、血圧等と疲労調査に有意差があり、他覚的疲労、自覚的疲労の両方において3交代制勤務のほうが、2交代制勤務よりも疲労が大きいことが示唆された。原田さとみ　片山恵　阿曽洋子
3.全身浴との比較から見た手浴が及ぼすリラクセーション作用の検証～成人女性の副交感神経活動に及ぼ	共	2018年10月	第26回看護人間工学部会研究発表会、p.8、2018.10（西宮）	全身浴と手浴が成人女性の副交感神経活動へ及ぼす影響を比較し、手浴が全身浴と同様にリラクセーション作用をもたらすかを検証する事を目的とした。被験者は20歳の健康な女子大学生18名とし、10分間の全身浴もしくは手浴を行い、 その後60」分間のベッド上安静とした。その結果、手浴も全身浴も実

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
す影響から～				施後安静にすることにより副交感神経活動が優位となった。このことから手浴は全身浴と同様にリラクセーション作用をもたらすことが示唆された。山口 晴美、阿曽 洋子、田丸 朋子、片山 恵、岩﨑 幸恵
4.健康高齢者に対する電動ベッドにおける身体負荷を考慮した背下げ方法の検討～筋活動・主観調査の観点から～	共	2018年10月	第26回看護人間工学部会研究発表会、p.21（西宮）	電動ベッドにおける身体負荷を考慮した背下げ方法を筋活動と主観的評価の観点から検討する事を目的とした。被験者は、70～75歳の女性高齢者11名。背ボトムを60°から0°まで一気に下げる方法（対照群）と背ボトムを60°から30°まで下げたところで一旦止めて背抜きを行い、30秒の安静後に背ボトムを0°まで下げる方法（実験群）とし、対象者の筋活動と主観評価（VAS）を測定した。対照群の筋活動は、安静時より大きく、対象者は水平より下がると感じていた。一方実験群では筋活動が安静時より大きく、対象者は頭が水平より下がると感じていた。実験群は必要以上の身体負荷がかかる方法であるとは言い切れなかった。 谷川 茜、藤田 晴久、川原 恵、田丸 朋子、岩崎 幸恵、片山 恵、阿曽 洋子
5.対話形式の看護倫理教育による道徳的感性の育成効果	共	2018年８月	第49回日本看護学会－看護教育－学術集会、pp.155（広島）	対話形式の看護倫理教育を行い、看護師の道徳的感性の育成が可能かどうかの検証を行った。対象はA病院病棟看護師25名。教育方法はワールド・カフェを参照に対話形式の研修を実施した。内容は、倫理的な感受性が問われるテーマとし、研修前後で日本語翻訳版道徳的感性尺度（11因子34項目）」を用い、無記名回答で調査した。その結果、看護師経験年数10年未満で有意に道徳的感性は向上することが明らかになった。藤田 晴久、池 美保、熊谷 由香里、片山 恵、阿曽 洋子
6.主観的指標による全身浴と手浴が及ぼすリラクセーション作用の検証	共	2018年3月	日本看護研究学会第31回近畿・北陸地方会学術集会、pp.37（西宮）	全身浴と手浴に対するリラクセーション作用を、主 観的指標（POMS2）を用いて検証した。20歳の健康な女子大学生9名を対象とし10分間の全身浴、手浴を行い、その後60分間のベッド上安静とした。主観的 指標はPOMS2を用いて実施前、実施後、終了時の3回、調査を起こなった。全身浴・手浴ともに「緊張-不安」において実施前と終了時で有意に低下し、全身浴・手浴どちらも身体的な緊張が緩和され、ネガティブな気分や疲労感が軽減し、リラクセーション効果があることが示唆された。山口 晴美、田丸 朋子、片山 恵、岩崎 幸恵、清水 佐知子、阿曽 洋子
7.長期臥床高齢者における心拍数変動の実態	共	2018年3月	日本看護研究学会第31回近畿・北陸地方会学術集会、pp.48（西宮）	心拍を測定可能である就寝時睡眠状態測定機「眠りSCAN」を用いて病院に入院している日常生活自立度Ｃランクの患者20名の心拍数を測定した。日中は 夜間よりも大きく変動し、夜間は低下し始め、朝方にかけて上昇するという変動がみられ、正常なサーカディアンリズムと類似していることがわかった。しかし、ADLが低い人ほど正常なサーカディアンリズムが失われるという結果も報告されており、周期性の違いと寝床内気候への影響を検討する必要があると考えられた。林 愛乃、伊部 亜希、宮嶋 正子、片山 恵、石澤 美保子、藤本 かおり、阿曽 洋子
8.健康成人女性における後頸部温罨法の入眠促進に及ぼす影響	共	2018年3月	日本看護研究学会第31回近畿・北陸地方会学術集会、pp.35、2018.3（西宮）	本研究の目的は乾熱法を用いた後頸部温罨法による心拍間隔時間と末梢皮膚温の変化を検討することである。成人女性15名に、後頸部温罨法を30分間行い、心拍間隔時間(以下IBI値)、手足の表面皮膚温度の測定を行った。対照群を設定し、同様の測定を行った。結果、IBI値の増大が測定開始後、対照群は21分のみで、実験群は12分から27分まで持続していた。後頸部温罨法の実施によりIBI値が大きくなるまでの時間が早く現れ、IBI値の増大が持続しているのは交感神経活動の抑制が考えられた。 川原 恵、阿曽 洋子、片山 恵
9.上方移動援助時におけるベッドの高さと看護師の腰部負担との関係　－TAMAツールを用いた分析	共	2017年8月	日本看護研究学会第43回学術集会 p.266	療養病棟で行われている上方移動援助における環境の整備・姿勢の安定性・動作の効率性の実態を、「移動援助動作アセスメントツール」（以下「TAMA ツール」）を用いて明らかにした。臨床で行われている上方移動援助を32 名の看護師が行い、観察項目を、TAMA ツールへ記入した。その後、ツールの項目における各選択肢の、項目合計に対する比率を算出した。計292回の上方移動援助を分析対象

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
				とした。「補助具の使用」は「あり」が30.5%、「ベッドの高さ」は「看護師の身長の半分程度の高さ」が42.5%であった。看護師の前傾角度の大きさは、「前傾角度が45度以下」は56.8%、「看護師の胴のひねりや側屈」が「なし」が83.9%と高かった。このことから看護師が意識して改善できる環境の必要性が示唆された。田丸 朋子、阿曽 洋子、本多 容子、片山 恵、山口 晴美
10.Testing validity of evaluating skin blood perfusion by our d eveloped device in seniors	共	2017年7月	Sigma Theta Tau International's 28th International Nursing Research Congress (Dublin)	https://stti.confex.com/stti/congrs17/webprogram/Paper84624.html Aki Ibe, Yoko Aso, Tomoyuki Haga, Masako Miyaji ma, Aino Hayashi, Megumi Katayama, Kaori Fujimo to, Mihoko Ishizawa, Kazuhiro Takeda
11.Comparison of Skin Temperature and Bed Climate of Bedridden Elderly Patients in Summer and Winter	共	2017年7月	Sigma Theta Tau International's 28th International Nursing Research Congress (Dublin)	https://stti.confex.com/stti/congrs17/webprogram/Paper84912.html Aino Hayashi, Aki Ibe, Yoko Aso, Masako Miyajima, Megumi Katayama, Kaori Fujimoto, Mihoko Ishizawa, Tomoyuki Haga, Kazuhiro Takeda
12.Fact-Finding Survey of Defecation Behavior in Young Japanese Adults	共	2017年７月	Sigma Theta Tau International's 28th International Nursing Research Congress (Dublin)	https://sigma.nursingrepository.org/handle/10755/622038 Katayama, Megumi; Aso, Yoko; Ibe, Aki; Katayama, Osamu; Matsuzawa, Hiroko
13.臥床高齢者と健康高齢者における 布団被覆時の足部血流変化の比較	共	2016年11月	第37回バイオメカニズム学術講演会 （仙台）	臥床高齢者と健康高齢者の推定血流量の比較では、 下腿部の布団被覆による変化は健康高齢者に大きく 、再度布団を除去してからの変化も健常高齢者が優 位に変化していた。 伊部亜希、阿曽洋子、宮嶋正子、林愛乃、片山恵、 藤本かおり、石澤美保子、羽賀知行、竹田和博、長 岡　浩
14.長期臥床高齢者における自律神経 活動の実態	共	2016年9月	第15回日本看護技術学会	日常生活自立度Cの患者を対象にLF/HF比から寝たきり高齢者の自立神 経活動について調査した。1日を通してほとんど動きがなく、活発な自律神経活動を認めなかった。 林　愛乃、伊部亜希、阿曽洋子、宮嶋正子、片山恵 、石澤美保子、藤本かおり
15.臥床高齢患者の布団被覆前後にお ける足底皮膚表面温度の変化につ いて	共	2016年9月	日本褥瘡学会学術集会	日常生活自立度Cランクの患者19名を対象に足部の温 度変化見た。寝床内温度が蒲団被覆前に低いければ 皮膚表面温は低く、布団被覆前の皮膚表面温度が高 ければ除去後も温度が高い傾向があることがわかった。。 木内 さゆり、伊部 亜希、林 愛乃、宮嶋 正子、片 山 恵、藤本 かおり、石澤 美保子、竹田 和博、阿 曽 洋子
16.長期臥床高齢者における布団被覆 時の足部血流の変化と自律神経活 動との関係	共	2016年9月	第15回日本看護技術学会学術集会	褥瘡発生リスクのある長期臥床高齢者に対する計測で布団 被覆により足部血流の増加を認め、交感神経指標のLF/HF比の変動と 血流の変化に関係を認めた。 伊部亜希、阿曽洋子、林　愛乃、宮嶋正子、片山恵 、石澤美保子、藤本かおり
17.Straining and Physical Effects of Different Toilet Defecation Postures	共	2016年７月	Sigma Theta Tau International's 27th International Nursing Research Congress	https://sigma.nursingrepository.org/handle/10755/616281 Katayama, Megumi; Aso, Yoko; Matsuzawa, Hiroko; Katayama, Osamu; Ibe, Aki

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
18.臥床高齢者の足部掛布団有無によ る足部皮膚温保持効果の評価	共	2016年6月	(Capetown) 日本人間工学会第57回 大会（三重）	健常高齢者20名を対象に足部の掛け布団の有無で皮膚表面温度の変化を測定した。計測部位は胸部、下腿部、足底、足元の寝具上とした。被覆直後は高い温度勾配で皮膚表面温度は上昇し、除去後はさらに強い勾配で下降を示した。 宮嶋 正子、阿曽 洋子、伊部 亜希、片山 恵、藤本かおり、林 愛乃、石澤 美保子、羽賀 知行、竹田和博
19.下腿部の掛け布団の有無による 足底湿度の変化に関する研究	共	2016年6月	日本人間工学会第57回 大会（三重）	足底の湿度は精神性発汗の程度を示すが、掛け布団の除去による温度刺激により約半数の高齢者に湿度上昇を認め、男女比では男性が有意に多い結果が得られた。 藤本 かおり、阿曽 洋子、宮嶋 正子、片山 恵、伊部 亜希、林 愛乃、石澤 美保子、竹田 和博、羽賀知行、長岡 浩
20.看護診断決定に関連した看護師の経験内容や課題意識に基づくサポート体制の検討	共	2015年12月	日本看護科学学会学術集会講演集35回 p.641（広島）	看護診断の決定に関連した看護師の経験内容についてその際の思考、行動、感情傾向の観点から看護診断への課題意識と職場へのサポート体制を検討した。その結果、臨床現場では必ずしも看護診断が段階的ステップを踏むのではなく、経験的、直感的思考を含めながら展開されていることが明らかになった。電子カルテの使用、情報共有に対する課題が挙げられ、サポート体制の必要性が示唆された 共同発表者　久米弥寿子　阿曽洋子　片山恵　上田記子　谷口千夏　山口晴美
21.布団被覆時の血流と皮膚表面温度・湿度、寝床内温度・湿度との関係 －高齢者を対象とした踵骨部での検討－	共	2015年11月	第23回看護人間工学部会 総会・研究発表会 ｐ20（宮崎）	高齢者を対象とし、褥瘡好発部位である踵骨部において、かけ布団を被覆した際の血流の変化と皮膚表面温度・湿度、 寝床内温度・湿度との関係を検討した。推定血流量、皮膚表面温度・湿度、寝床内温度・湿度ともに、被覆前に比べ被覆後の値が有意に高くなったが、踵骨部の変化は母趾下に比べ有意に小さかった。また、血流量の変化と皮膚表面温度の変化に正の相関が認められたことから、被覆による血流増加と温度上昇の関係が確認された。 伊部亜希　阿曽洋子 宮嶋正子 石澤美保子 林愛乃　藤本かおり 片山恵 羽賀知行 竹田和博
22.布団被覆時の血流と皮膚表面温度 、寝床内温度・湿度との関係－高 齢者を対象とした踵骨部での検討－	共	2015年10月	第23回看護人間工学部 会（宮崎）	推定血流量、皮膚表面温度・湿度、寝床内温度・湿度とも被覆により上昇した。血流量が大きいほど寝床内温度変化も大きい正の相関を認めた。 伊部 亜希、阿曽 洋子、宮嶋 正子、石澤 美保子、林 愛乃、藤本 かおり、片山 恵、羽賀 知行、竹田和博
23.布団被覆時の血流と皮膚表面温度 、寝床内温度・湿度との関係－高 齢者を対象とした踵骨部での検討	共	2015年10月	第23回看護人間工学部 会（宮崎）	推定血流量、皮膚表面温度・湿度、寝床内温度・湿度とも被覆により上昇した。血流量が大きいほど寝床内温度変化も大きい正の相関を認めた。 伊部 亜希、阿曽 洋子、宮嶋 正子、石澤 美保子、林 愛乃、藤本 かおり、片山 恵、羽賀 知行、竹田和博
24.椅座位姿勢角度の違いによる怒責時の筋力と主観的負担感	共	2015年10月	第23回看護人間工学部会 総会・研究発表会　ｐ19（宮崎）	洋式トイレを想定した椅座位の姿勢角度による怒責時の筋力の検証と主観的な感覚について明らかにすることを目的とした。 その結果、怒責時の姿勢角度の違いにより、使用する筋力の大きさに有意差がなかった。どのような角度でも怒責をかけても同じくらいの筋力を使っていることが考えられた。主観的には30度の姿勢角度の負担が大きいことがわかり同じ怒責の力でも負担感が異なることは確認された。 共同発表者　片山恵　阿曽洋子　伊部亜希　　松澤洋子　片山修
25.The Learning Attained through Practical Nursing Training	共	2014年5月	35th International Association for Human Caring	MITANI Rie ; KATAYAMA Megumi ; SEKIDO Keiko ; UESUGI Yuko ; HOSONA Mio ; NAKANISHI Yasuhiro

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
experiences: Perspectives of Nursing Students			conference (Kyoto)	
26.The Effectiveness of Nursing Process Lectures through Case Study		2014年5月	35th International Association for Human Caring conference (Kyoto)	UESUGI Yuko ; MITANI Rie ; KATAYAMA Megumi ; HOSONA Mio ; NAKANISHI Yasuhiro ; SEKIDO Keiko
27.Occupational Identity of First-year Nursing Students: Comparison of Occupational Identity According to Whether Nursing Students Were Satisfied with Their Decision to Major in Nursing	共	2014年5月	35th International Association for Human Caring conference (Kyoto)	SEKIDO Keiko ; HOSONA Mio ; UESUGI Yuko ; MITANI Rie ; KATAYAMA Megumi ; NAKANISHI Yasuhiro
28.Learning in Fundamental Nursing Practice.: Interraction with Patients	共	2014年5月	35th International Association for Human Caring conference (Kyoto)	HOSONA Mio ; UESUGI Yuko ; NAKANISHI Yasuhiro ; MITANI Rie ; KATAYAMA Megumi ; SEKIDO Keiko
29.Contents Learned by First-year Nursing Students in a Class on Nursing Theory	共	2014年5月	35th International Association for Human Caring conference (Kyoto)	SEKIDO Keiko ; MITANI Rie ; HOSONA Mio ; UESUGI Yuko ; NAKANISHI Yasuhiro ; KATAYAMA Megumi
30.Characteristics of Self-awareness Experienced during the Clinical Practice of Fundamental Nursing	共	2014年5月	35th International Association for Human Caring conference (Kyoto)	HOSONA Mio ; NAKANISHI Yasuhiro ; UESUGI Yuko ; MITANI Rie ; KATAYAMA Megumi ; SEKIDO Keiko
31.中咽頭癌患者の同時併用化学放射線治療に伴う有害事象の変化-治療開始から治療終了後 9ヶ月までの経時的変化-	共	2014年3月	日本看護研究学会 近畿北陸地方会学術集会（金沢）	中咽頭癌患者に対する同時併用化学放射線治療による栄養低下、体重減少、QOL低下を予防するために有害事象出現時期と程度を口内乾燥、嚥下障害、口腔粘膜炎、唾液管の炎症、食欲不振について調査した。CCRTによる副作用である有害事象や栄養状態の判定指標は、生理・生化学、形態学的データが採用されることが多い。しかし、今回の調査でCCRT終了後9ヶ月を経過しても有害事象が残存し、症状が完全に消失するには長い時間を要することが確認できた。 共同発表者　松澤洋子　片山恵
32.看護師における継続教育に関する海外の研究動向と課題	共	2013年12月	日本看護科学学会学術集会講演集33回 p.48（大阪）	看護師における継続教育に関する海外の研究動向と課題を明らかにすることを目的に文献検討を行った。最先端医療に関する継続教育は、主に先進国で実施されており、医療の急激な進歩についていくために継続教育が欠かせない状況がわかった。 共同発表者：關戸 啓子、上杉 裕子、細名 水生、片山 恵、三谷 理恵、中西 泰弘
33.Current situations and challenges of nursing research	共	2013年10月	International Nursing Conference and	日本における月経障害に関する看護研究の現状と課題を文献検討によって明らかにした。その結果、研究対象とした84論文中23論文は、介入研究であり、3論文のみがランダム化比較研究であった。月

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
on menstrual symptoms in Japan			World Academy of Nursing Science 3rd (KOREA)	経随伴症状緩和のための看護ケアは看護のアセスメントで実施できるために、介入研究が増えていることを示唆された。 共同発表者：Keiko Sekido,Rie mitani,Mio Hosona,Yasuhiro Nakanishi,Megumi Katayama,Yuko Uesugi
34.Current situations and challenges of nursing research on menopausal symptoms in Japan	共	2013年10月	International Nursing Conference and World Academy of Nursing Science 3rd (KOREA)	日本における更年期障害に関する看護研究の現状と課題を文献検討によって明らかにした。その結果「更年期障害へ影響要因(32)」「更年期障害への対処方法(12)」「更年期障害の実態(9)」「更年期障害に対する認識(6)」「更年期障害の緩和のための介入の評価(5)」「その他(5)」に分類された。今後は、介入と予防方法の効果を調べる研究が必要であると考えられた。 共同発表者：Keiko Sekido,Rie mitani,Mio Hosona,Yasuhiro Nakanishi,Megumi Katayama,Yuko Uesugi
35.喉頭摘出者が患者会で得ているもの	共	2013年3月	日本看護研究学会 近畿北陸地方会学術集会　p.38（和歌山）	喉頭摘出後、患者が自主的に参加する患者会で、患者がその活動から何を得ているのかを明らかにすることを目的とした。退院後の医療従事者とのかかわりの希薄さや情報提供を求められていることが明らかになり、退院後の医療者のサポートの必要性がある。 共同発表者：松澤洋子、片山恵、久保まどか
36.中咽頭がん患者の化学放射線療法に伴う味覚の変化	共	2013年	日本看護研究学会　近畿北陸地方会学術集会　p.37（和歌山）	中咽頭がんの患者の化学療法に伴う味覚の変化の詳細を9か月間にわたりprospectiveに調査した。その結果、対象者4名全員に有害事象が起こった。とくに味覚の中では甘味の回復が遅延することが明らかになった。 共同発表者：松澤洋子、片山恵
37.基礎看護学実習における看護学生の学びの過程　－清潔援助に焦点を当てて－	共	2012年7月	日本看護学教育学会誌 22巻学術集会講演集 p.246（熊本）	基礎看護学実習での清拭援助に焦点を当て、学生の学びの様相を明らかにした。学生は、援助の回を重ねるごとに患者の反応に気づき、そのひとにとっての援助をしたいという思いになっていくことが明らかになった。 共同発表者：山本純子、三谷理恵、中西泰弘、細名水生、片山恵、矢田眞美子
38.上方移動援助動作アセスメントツールの腰部負担評価としての妥当性の検証	共	2011年11月	日本看護科学学会学術集会講演集31回 p.215（高知）	看護師の上方移動援助の腰部負担評価として作成したツールの信頼性と妥当性について検討した。その結果、作成したツールは信頼性と妥当性があったということが明らかになった. 共同発表者：田丸朋子、阿曽洋子、伊部亜希、本多容子、片山 恵
39.ベッド上での水平移動時における看護師の腕の差し入れの深さと重心軌跡	共	2011年7月	日本看護研究学会雑誌 34巻3号 p.268（横浜）	ベッド上の水平移動時に患者の腰部に差し入れる看護師の手の差し入れ方の違いによる看護援助の負担度について検討した。その結果、浅い差し入れの場合は、重心が既定面から外れる場合があり、不安定さと負担が増すことが明らかになった。 共同発表者：假谷ゆかり、阿曽洋子、伊部亜希、田丸朋子、本多容子、荒岡広子、片山恵
40.車椅子移乗援助時におけるベッドの高さの違いが動作の効率性・安定性に与える影響　－看護師の荷重中心の動きから－	共	2010年8月	看護人間工学研究誌 11巻　p.56（福岡）	ベッドから車いすへの移動時のベッドの高さが看護師の移動援助にどのような身体負担を与えるかを検討した。低いベッドの高さでの移動は看護師、患者双方に負担が大きいことが明らかになった。 共同発表者：田丸朋子、阿曽洋子、伊部亜希、本多容子、片山恵、假谷ゆかり、荒岡広子
41.ケアハウス入居高齢者に対する足浴が歩行周期に与える影響	共	2010年8月	看護人間工学研究誌 11巻p.56（福岡市）	ケアハウスに入所している高齢者を対象に継続的に足浴を実施し、対象者の歩行周期に変化があるかどうかを調べた。その結果、対照群に比べて実験群の歩行周期が上がったという結果を得た。 共同発表者：本多容子、阿曽洋子、伊部亜希、田丸朋子、片山恵、假谷ゆかり、荒岡広子
42.糖尿病患者に対するシムス位施行による排便促通効果	共	2009年7月	日本看護研究学会雑誌 32巻3号 p.348（横浜）	便秘症の糖尿病患者を対象に入院期間中腹臥位を施行することによって、排便促通効果があるかどうかを調べた。結果、腹臥位を行った群の方が対照群に比べて便秘症が改善することが明らかになった。 共同発表者：片山恵、阿曽洋子、伊部亜希、徳重あつ子、岡みゆき
43.施設入居高齢者における仰臥位からの座位への姿勢変化がもたらす脳活動	共	2008年11月	日本看護科学学会学術集会講演集28回　p.186（福岡）	意識障害のある高齢者に対し、ベッドをヘッドアップして座位姿勢を行っていただくことにより、脳活動の変化をみた。結果、仰臥位から座位に近づいた体位は、脳活動を活性化させることが示唆された。 共同発表者：徳重あつ子、阿曽洋子、伊部亜希、岡みゆき、片山恵

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
44.回復期脳卒中片麻痺患者の排泄への援助実態と非麻痺側筋肉量の関係からみた排泄援助のあり方	共	2008年11月	日本看護科学学会学術集会講演集28回 p.379（福岡）	回復期脳卒中片麻痺患者への排泄の援助援助の実態を調査した。その結果、排泄場所までの移動を行う、排泄行為を援助を受けながらも自力で排泄行為を試みたほうが、非麻痺側の筋肉量が増加することが明らかになった。そのため、排泄を自力で行うように促していくことが大切であることが示唆された。 共同発表者：岡みゆき，阿曽洋子，伊部亜希，徳重あつ子，片山恵
45.腸蠕動からみたシムス位ポジショニングによる自然排便への可能性の検証	共	2007年11月	日本看護科学学会学術集会講演集27回（東京）	仰臥位からシムス位への体位変換により、腸蠕動運動が活性化されるかを腸音を解析することにより明らかにした。結果、体位変換直後に腸蠕動は亢進した。このことからシムス位への体位変換が腸蠕動運動を更新させることが明らかになった。 共同発表者：片山恵、阿曽洋子、伊部亜季、徳重あつ子、岡みゆき、木村静
46.高齢者クラブにおける世代間交流事業の実態と子どもの印象からみた事業継続要因の分析	共	2007年6月	老年社会科学 29巻2号　p.213	地域の高齢者クラブの事業でのこどもと高齢者の交流の実態を調査するとともに、参加している子供の視点から事業に関しての感想を聞き事業の継続要因を分析した。結果、高齢者子供双方が同じ興味や楽しみをもてる内容校正を行うことが継続へのカギであることが分かった。 共同発表者：前田知穂、阿曽洋子、高田幸恵、伊部亜希、片山恵、岡みゆき、徳重あつ子
47.生理学的指標から見たシムス位の身体的安楽性の検証	共	2006年12月	第26回日本看護科学学会学術集会 p.349（神戸）	褥瘡予防の体位として考えられるシムス位の安楽性について検討した.仰臥位からシムス位への体位変換は、副交感神経のHF値、RR地に有意差がなかったが安楽を示す傾向は見られた。褥瘡の発生予防の体位として活用するこができることが示唆された。 共同発表者：片山恵、阿曽洋子、伊部亜希、岡みゆき、徳重あつ子、高田幸恵、前田知穂
48.健康若年者におけるベッド上座位への姿勢変化がもたらす脳活動 －脳波、大脳局所Hb、心電図分析より	共	2006年12月	第26回日本看護科学学会学術集会 p.349（神戸）	ギャッチベッド上で仰臥位から坐位へ姿勢を変化させた時の大脳の活動状態を生理学的な指標を用いて分析し、大脳を活性化するケアとしての坐位姿勢援助の有効性について基礎的な検証を行った. 共同発表者：徳重あつ子、阿曽洋子、伊部亜希、岡みゆき、片山恵、高田幸恵、前田知穂
49.高齢患者の清拭群とシャワー入浴群との皮膚機能の比較からみた清潔ケア方法の有用性の検証	共	2006年12月	第26回日本看護科学学会学術集会 p.346 （神戸）	高齢患者の清拭群とシャワー入浴群について入院時と1週間後の皮膚機能を比較した。ケア方法の比較では1週間後の皮膚機能に大きな違いは見られなかった。 共同発表者：伊部亜希、阿曽洋子、宮嶋正子、岡みゆき、徳重あつ子、片山恵、前田知穂、高田幸恵
50.高齢クラブにおける世代間交流事業の実態調査 －クラブ企画と事業評価・子どもへの印象との関連の検討－	共	2006年12月	第26回日本看護科学学会学術集会 p.388　（神戸）	高齢者クラブにおける世代間交流事業の実態を調査し、クラブ企画と事業評価、子供への印象の関連を検討した。交流事業の評価は肯定的であり子供への印象も良好であったため積極的な交流の実態が示唆された。 共同発表者：前田知穂、阿曽洋子、高田幸恵、岡みゆき、徳重あつ子、片山恵、伊部亜希
51.体圧分散マットレスにおける端座位保持中の身体的安楽性の評価	共	2006年12月	第26回日本看護科学学会学術集会 p.217　（大阪）	体圧分散マットレスにおける端坐位保持中の身体安定性を動作解析と主観的な安定感から評価した。端坐位保持中の身体安定性は汎用マットレスに比べて体圧分散マットレス、特に枠無ウレタン、エアマットレスで悪いことがわかった。体圧分散マットレス使用者で離床も促している場合、枠有ウレタンの選択、端坐位保持中にはクッションを用いた身体の固定、ベッド柵設置等の対策が重要と考えられた。 共同発表者：岡みゆき、阿曽洋子、伊部亜希、徳重あつ子、片山恵、高田幸恵、前田知穂、矢野祐美子
52.坐位姿勢の脳活性への有効性に関する基礎的研究　－前頭葉の脳波分析から－	共	2005年10月	第26回日本バイオメカニズ学界講演会 p.143-144　（栃木）	坐位姿勢の第一歩であるギャッチアップによる坐位に着目し、仰臥位から坐位への姿勢変化による脳活性を脳波でとらえることを試みた。仰臥位から坐位への姿勢の変化によって様々な刺激情報が脳に入り、それに伴う脳活動を脳波でとらえることができた。 共同発表者：徳重あつ子、阿曽洋子、伊部亜希、岡みゆき、片山

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
				恵、矢野祐美子
53.体圧分散マットレスの違いによる起き上がり動作時の生体負担の評価	共	2005年10月	第26回日本バイオメカニズム学会講演会　p.23-26（栃木）	起き上がり動作に着目し、動作時の沈み込みと生体負担の関係性をみることを検討した。 共同発表者：岡みゆき、阿曽洋子、伊部亜希、徳重あつ子、片山恵、矢野祐美子
54.3次元動作解析による体圧分散マットレス上での起き上がり動作の評価	共	2005年9月	第13回看護人間工学部会　（京都）	体圧分散マットレスにおける起き上がり動作時の生体負担について基礎データを得た。 4種類の体圧分散マットレス上での起き上がり動作時の身体角度や沈み込みが異なることが明らかになった。 共同発表者：岡みゆき、阿曽洋子、伊部亜希、徳重あつ子、片山恵、高田幸恵、前田知穂、矢野祐美子
55.脳波からみた坐位姿勢援助の有効性に関する基礎的研究 －パイロット・スタディー	共	2005年9月	第13回看護人間工学部会（京都）	座位姿勢の角度を変えることにより脳波がどのように活性化するかについてのデータを得た。 共同発表者：徳重あつ子、阿曽洋子、伊部亜希、岡みゆき、片山恵、高田幸恵、前田知穂、矢野祐美子
56.手術中の患者に対する側臥位保持枕の検討	共	2004年9月	第18回日本手術看護学会学術集会 p.128-131（仙台）	手術中に使用する側臥位保持枕を受圧面積が広い枕として考案し、臨床で試験した結果、体圧が大幅に減少し、褥瘡の予防に役立つことが示唆された。 共同発表者：迫平智江、小林俊美、玉野裕子、下段佳美、前田智子、立溝江三子、武井尚子、片山恵
57.臨床実習につながる模擬患者を用いた教育方法の工夫　－演習記録の内容の分析より－	共	2002年7月	日本看護教育学会誌　12巻p.114（札幌）	模擬患者を利用した看護援助の計画と実践をおこない、そのときの学生の看護記録を分析した。 共同発表者：柴田しおり、登喜和江、山下裕紀、片山恵、仁平雅子、川西千恵美
58.臨床実習につながる模擬患者を用いた教育方法の工夫　－学生の授業評価より	共	2002年7月	日本看護教育学会学術集会　p.114（札幌）	模擬患者を利用した看護援助の計画と実践をおこない、そのときの学生の授業評価を分析した。 共同発表者：登喜和江、柴田しおり、山下裕紀、片山恵、仁平雅、川西千恵美
59.高齢者の仙骨部褥瘡発生と皮下脂肪厚との関連性	共	2001年12月	第21回日本看護科学学会学術集会 p.242　（神戸）	皮下脂肪厚をエコーで計測し、厚い群と薄い群にわけ、長時間仰臥位における仙骨部の血液中のHb値の変化で検討した。結果、皮下脂肪の厚い群は、虚血や貧血は少なく、やせ群には虚血や貧血が多いことがわかった。 共同発表者：片山恵、阿曽洋子、高田喜代子、木村静、細見明代、新田紀枝
60.ファウラー位におけるヘッドアップ角度が身体・精神面の安全・安楽に及ぼす影響	共	2001年12月	第21回日本看護科学学会学術集会 p.196　（神戸）	ファウラー位のヘッドアップ角度の違いにより、精神面の安楽にどのような変化を与えるかを明らかにした。ヘッドアップ15度がもっとも安楽な角度であった。 共同発表者：木村静、阿曽洋子、高田喜代子、片山恵、細見明代、新田紀枝
61.阪神・淡路大震災後の仮設住宅で暮らす住民の健康と生活に関する経時的変化	共	1999年12月	第19回日本看護科学学会学術集会（静岡）	仮説住宅住民への生活と健康状態の実態調査により看護援助活動開始期と終了期の仮設住宅住民の変化を明らかにした。サポート面での高い改善がみられ、健康状態も精神状態も改善傾向を示した。 本人担当部分：共同研究につき、抽出不可能。 共同発表者：渡邊智恵、片山京子、安藤幸子、片山(渡邊)恵、沼本教子、臼井千津、吉永喜久恵、中島美繪子
62.相談相手の有無と仮設住宅住民の生活および健康状態の実態との関連	共	1999年7月	第1回日本災害看護学会学術集会（神戸）	仮設住宅住民の生活および健康状態の実態調査から、相談相手の有無により、健康状態に違いがみられ、相談相手の必要性が示された。 本人担当部分： 共同発表者：片山京子、安藤幸子、中田康夫、片山(渡邊)恵、渡邊智恵、沼本教子、臼井千津、吉永喜久恵、中島美繪子
63.阪神淡路大震災被災者仮設住宅入居者の健康及び生活実態の年齢層別による分析	共	1998年11月	第3回日本老年看護学会学術集会（東京）	看護援助を行っている仮設住宅入居者へ健康調査をおこなった。向老期の入居者の健康状態、心理状態に問題が見え、援助の必要性が明らかになった. 本人担当部分：共同研究につき、抽出不可能。 共同発表者：中田康夫、沼本教子、片山(渡邊)恵、片山京子、臼

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
64.移動の援助技術方法の違いと看護者の局所負担度	共	1998年7月	第24回日本看護研究学会学術集会 p.124（青森）	井千津、安藤幸子、吉永喜久恵、中島美繪子 起き上がりの援助方法の違いによる腕、大腿などへの筋負担度を計測した。 本人担当部分：共同研究につき、抽出不可能。 共同発表者：柴田真志、柴田しおり、吉岡隆之、西田恭仁子、片山(渡邊)恵、平田雅子
65.移動の援助技術方法の違いが看護者の全身負担に及ぼす影響	共	1997年7月	第24回日本看護研究学会学術集会 p.124 （青森）	起き上がりの援助方法の違いによる全身の疲労度を酸素摂取量で計測した。 本人担当部分：共同研究につき、抽出不可能 共同発表者：柴田しおり、吉岡隆之、西田恭仁子、片山(渡邊)恵、平田雅子、柴田真志
３．総説				
1.【看護学生が知っておきたい　やってはいけないケアと処置】　皮膚ケアのやってはいけない褥瘡患者の創部・発赤部をマッサージしたり、円座を使用してはいけない	共	2009年2月	プチナース 18巻2号 p.44	看護援助として患者さんに行ってはならない行為にについてを理由をつけて看護学生向けに簡易に解説した。
2.【やってはいけない看護ケア】 褥瘡創面の処置に、安易に消毒剤を使用してはいけない	共	2008年11月	Expert Nurse 24巻14号 p.102	心理的にもしくは生理学的に患者さんに行ってはならない言動や援助についてを短く理由をつけて解説した。
3.【やってはいけない看護ケア】 褥瘡患者の創部・発赤部をマッサージしたり、円座を使用してはいけない	共	2008年11月	Expert Nurse 24巻14号 p.103	心理的にもしくは生理学的に患者さんに行ってはならない言動や援助についてを短く理由をつけて解説した。
4.【やってはいけない看護ケア】　褥瘡患者の創部・発赤部をマッサージしたり、円座を使用してはいけない	共	2008年11月	Expert Nurse 24巻14号 p.103	心理的にもしくは生理学的に患者さんに行ってはならない言動や援助についてを短く理由をつけて解説した
5.【やってはいけない看護ケア】 高齢者に対して、「おばあちゃん」「おじいちゃん」と呼称したり子どもに話すように高い声で話してはいけない	共	2008年11月	Expert Nurse 24巻14号 p.136	心理的にもしくは生理学的に患者さんに行ってはならない言動や援助についてを短く理由をつけて解説した。
6.ステップ別ケーススタディのしかた・書きかたガイド	共	2007年11月	プチナース 16巻13号 p.16-35	実習後のケーススタディの書き方を事例を表示しながら解説した。 本人担当部分：原稿執筆を担当 共著者名：松澤洋子、片山恵

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
３．総説				
7.理論実践教室　困った患者さん見方を変えればケアも変わる　第18回　リウマチで悲嘆にくれる患者さんに何ができる？－ミッシェルの「病における不確かさ」理論－	共	2003年9月	ナースビーンズ 5巻9号 p.912-913	リウマチを発症した中年の女性の事例を用いてミッシェルの理論を解説した
8.実践教室　困った患者さん見方を変えればケアも変わる　第17回　透析導入を頑なに拒否する患者さん、そのつらさに共感・同感－トラベルビーの理論をつかって－	共	2003年8月	ナースビーンズ 5巻8号 p.804-805	専業主婦で透析導入にいたり、家族の迷惑になると自分の存在感をなくしかけた患者さんの事例を使い、トラベルビーの理論を解説した。 本人担当部分：原稿執筆を担当 共著者名：高田早苗、片山恵、登喜和江
9.語り伝える看護実践　第6回　HOTとお友だちになった原さん	共	2003年5月	Expert Nurse 18巻5号 p.84-87	慢性呼吸不全の患者さんへの実践の意味を解釈した。 本人担当部分：原稿執筆を担当 共著者名：小倉弘子、片山恵
10.語り伝える看護実践　第12回　かくも長き17年	共	2003年5月	Expert Nurse 19巻5号 p.84-87	退院したあとも17年間ずっと患者さんのフォローをしている看護師の実践の語りを解釈した。 本人担当部分：原稿執筆を担当 共著者名：片山恵、吉田尚美、高田早苗
11.理論実践教室　困った患者さん見方を変えればケアも変わる　第12回　禁煙を守れず「先生には黙っていて」と頼む患者さん。－ペンダーの改訂ヘルスプロモーションモデルを用いて－	共	2003年3月	ナースビーンズ 5巻3号 p.258-259	病院内の喫煙所で禁煙を指示されていた患者さんの事例をペンダーのヘルスプロモーション理論を用いて解説した。 本人担当部分：内容検討と原稿校正を担当 共著者名：蓬莱節子、片山恵
12.語り伝える看護実践　第9回　アトピー性皮膚炎と向き合う		2003年3月	Expert Nurse 19巻2号 p.78-81	アトピー性皮膚炎の看護外来を開いた看護師の実践の語りを解釈した。 本人担当部分：原稿執筆を担当 共著者名：片山恵、竹内淳子、藤森瑞穂、高田早苗
13.理論実践教室　困った患者さん見方を変えればケアも変わる　第8回	共	2002年12月	ナースビーンズ ４巻11号 p.1118-1119	慢性呼吸器不全の老婦人の看取りを事例にヘンダーソンの理論を説明した。 本人担当部分：原稿執筆を担当 共著者名：高田早苗、片山恵、仁平雅子
14.語り伝える看護実践　第3回　可能性に賭けること	共	2002年8月	Expert Nurse 18巻10号 p.82-83	解釈した。 本人担当部分：原稿執筆を担当 共著者名：片山恵、高田早苗
15.理論実践教室　困った患者さん見方を変えればケアも変わる　第3回	共	2002年6月	ナースビーンズ 4巻6号 p.552-553	人工透析を受けに来ない患者さんの事例を用いてコービントストラウスの病みの軌跡理論を用いて解説した。 本人担当部分：原稿執筆を担当 共著者名：片山恵、登喜和江
４．芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
４．芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
５．報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1.臨床看護師のキャリア発達過程 ―職務経験10年のプロセスに焦点をあてて―	共	2019年8月31日	日本看護管理学会　論文奨励賞　の報告発表	離転職経験がなく役職をもたない臨床看護師の職務経験10年のキャリア発達過程を明らかにすることを目的とし、職務経験10～15年未満の臨床看護師7名を対象に，半構造化面接を行い質的に分析した。その結果，職務経験10年のキャリア発達過程は5フェーズで成り立っていることが明らかになった。 中本 明世，矢田 眞美子，三谷 理恵，片山 恵，細名 水生
2.「特定高齢者」対象の『転倒予防教室』における運動前の足浴の転倒リスク軽減効果の検証　（奨励会助成金研究報告）	共	2012年12月	日本看護研究学会雑誌　35巻5号 p.137-144	転倒予防教室で運動前に実施される足浴が、足部に関する転倒リスクに与える影響を検証した。結果、運動前に足浴を行うことが足部に関する転倒リスクを軽減することが示唆された。 本多 容子，阿曽 洋子，伊部 亜希，片山 恵，田丸 朋子
６．研究費の取得状況				
1.認知症高齢者における大脳の機能維持を目的とした手洗いの検証	共	2019年4月～2022年	日本学術振興会科学研究費助成金（基盤研究C）（代表者）徳重あつ子	認知症患者さんに対する手浴刺激の効果を検証し、日々の臨床に活用できるかを検討する。
2.汚染除去可視化による清潔のセルフケア能力アセスメントツールの開発	共	2019年4月～2021年	日本学術振興会科学研究費助成金（基盤研究C）（代表者）片山恵	セルフケア洗髪における汚染除去を可視化し、セルフケアアセスメントツールの開発を行う。
3.保湿素材を用いた靴下の踵部角質肥厚予防・改善効果の検証	共	2018年7月～2019年	株式会社山忠受託研究費 責任者　片山恵	踵部に保湿素材を用いた２種類の靴下を着用することによる効果の検証
4.褥瘡予防ケア向上を目指した交感神経活動と圧迫時血流変化の関係の検討	共	2018年4月～2020年	日本学術振興会科学研究費助成金（基盤研究C）（代表者）伊部亜希	交感神経活動と褥瘡が発生しやすい患者の血流動態との関連性を探索する。
5.清潔保持行動時の最適な汚染除去に必要な筋力	単	2017年９月	科学研究費補助金学内奨励金	洗髪に必要な筋力のデータを収集した。
6.入院・在宅高齢者の褥瘡早期検出機器開発の基礎研究	共	2017年4月～2019年	日本学術振興会科学研究費助成金（基盤研究C）（代表者）宮嶋正子	インピーダンスを用いた褥瘡の早期検出機器の開発を行う。
7.「看護過程・看護診断過程に関連するメディア・内容・送り手分析に基づく看護教育の検討」	共	2015年4月～2017年	日本学術振興会科学研究費助成金（基盤研究C）（代表者）久米弥寿子	看護診断に関する看護教育の方法について検討
8.「褥瘡予防のための足部・下腿部の産熱保持寝具・被覆用具による血流維持効果の検証」	共	2015年3月～2018年	日本学術振興会科学研究費助成金（基盤研究C）（代表者）阿曽洋子	褥瘡発生を予防する下腿部の保温効果の検証と保温道具の検討を行う。
9.「排便促通に効果的な怒責負荷の少ない排便姿勢の検討」	共	2013年4月～2016年	日本学術振興会科学研究費助成金（挑戦的萌芽研究）（代表者）片山恵	一般的な洋式トイレにで人が排便の努責をかけるためにとる姿勢の違いにより身体の負荷が異なるかを調べ、努責をかけやすくかつ身体負荷が最小である排便姿勢を探求することを目的とした。
10.「中咽頭がん患者の化学放射線療法による味覚とQOLに関する	共	2012年～2013	日本学術振興会科学研究費助成金（基盤研究C）	中咽頭がん患者の放射線療法後の味覚や栄養状態を調査し、身体的状況とQOLとの関連性を調査した。 共同研究者：松澤洋子、宇佐美眞、丹生健一、齋藤幹、矢田眞美

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
６．研究費の取得状況				
多施設共同前向き臨床試験」			分担者	子、片山恵、福田敦子、山根秀雄、井口広義
11.「仰臥位から腹臥位への体位変換が便秘症にもたらす排便促進効果」	単	2006年4月	公益信託山路ふみ子専門看護教育助成基金	腹臥位への体位変換による体位保持が便秘症の対症療法になり得るかを検討した。
12.「手術中の患者に対する側臥位保持枕の検討」	共	2002年4月～2003年	神戸市看護大学研究助成（臨床共同研究）	手術中の持続的な固定体位による褥瘡の発生を予防するための体位保持枕を検討した。神戸市立中央市民病院看護部との共同
13.「体位変換技術による剪断応力の発生と褥瘡との関連性」	単	2001年4月～2013	日本学術振興会科学研究費助成金（萌芽研究）　研究代表者	仰臥位から側臥位への体位変換を行う時にせん断が生じ、それが褥瘡発生の要因になるかを研究した。
14.「学内演習及び実習場面での〈観察〉の効果的教授方の検討」	共	2001年4月～2002年	神戸市看護大学研究助成	演習授業の中で、多床室の模擬病室を作成し、学生の病室内での行動を観察し、実習に向けての観察に関する教授方法を検討した。 本人担当部分：共同研究につき、抽出不可能。 共同研究者：登喜和江、柴田しおり、山下裕紀、片山恵、仁平雅、川西千恵美
15.「患者のセルフケアを支援する看護援助の取り組み」	共	2001年4月～2002年	神戸市看護大学研究助成	セルフケアを促す援助として行っている実践を臨床看護師に調査した。 共同研究者：高橋千恵子　高田早苗　仁平雅子　片山恵　中野悦子　山本和代 秋永美津江　赤松あや子　池上寿美　伊藤明美　伊東玲子　古織好子

学会及び社会における活動等	
年月日	事項
1.2019年4月	第45回日本看護研究学会査読
2.2018年10月	第26回日本人間工学会看護人間工学部会研究発表会　実行委員
3.2018年7月～現在	株式会社山忠からの受託研究
4.2018年3月	日本看護研究学会第31回近畿・北陸地方会学術集会　企画・実行委員長
5.2017年10月	第25回日本人間工学会看護人間工学部会研究発表会　実行委員
6.2015年4月～2017年3月	兵庫県看護協会阪神南地区代議員
7.2014年9月	第22回 看護人間工学部会総会・研究発表会　座長
	日本健康医学会
	日本看護管理学会
	日本自律神経学会
	日本看護技術学会
	日本看護研究学会
	日本看護科学学会